第十講　随筆の読解①

Step 1

一　次の文章を読んで、㈠～㈤の問いに答えなさい。

日本の風景が、世界のどこの国より美しいに違いないと思うようになったのは、五十代に(1)はいってからである。それまでは自分が生れ、自分が生い育った日本という国の四季それぞれの眺めに(2)さして関心は持っていず、桜の時季は桜の時季で、紅葉の季節は紅葉の季節で、その時々でなるほど美しいと思うことはあったが、ただそれだけのことで、それを格別なものとして楽しむことはなかったようである。

それが五十代にはいってから急に日本の風景を特別なものとして受取るようになり、還暦を過ぎる頃(3)から、花があろうとなかろうと、自分を取り巻いている外界の眺めを、その季節以外にはないものとして珍重するようになった。こう言うと、いかにも悟ったような言い方に聞えるかも知れないが、別段悟ったわけではない。年齢の作用ということもあろうが、それより小説を書く仕事から離れている時間を多少でも持てるようになり、自然に外界の景色というものに眼を向けることが多くなったためである。画家やカメラマンが、それから歌人や俳人が日本の風景に対して持っている眼を、遅ればせながら、私もまた持ち始めたということになろうか。

日本の風景は美しいと思う。世界中の国がそれぞれにその国独特の美しい風景を持っているが、日本の風景は、日本の風土と結びついたもので、世界のどの国もが持たない、しかも、なかなか上等な美しさを持っているものだと思う。言うまでもなく、それは春夏秋冬の狂いない回帰と結び付いたものである。四季はそれぞれの出番と持時間を持って、毎年毎年(4)几帳面にやって来る。そして、非常にデリケートなこまかい目盛りを刻みながら、春から夏、夏から秋、秋から冬、冬から春へと移行して行く。そしてその季節季節の移り変りに従って、自然界のあらゆるものが、山も、野も、川も、空も、木も、草も、雨も、風も、大気までが、その時々で表情とたたずまいを異ったものにして行く。

（井上　靖「日本紀行」より）

㈠　——線部分⑴の「はいっ」を、終止形（言い切りの形）に直して書きなさい。

㈡　——線部分⑵の「さして」の意味として最も適当なものを、次のア～オから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　それほど　イ　そもそも　ウ　そのうえ　エ　まったく　オ　いかにも

㈢　——線部分⑶の「から」と同じ意味で使われている「から」がある文を、次のア～エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　天気がよかったから散歩に出かけました。
イ　先に到着した人から順番に入場できます。
ウ　この押花は庭に咲いた花から作りました。
エ　新年から早寝早起きの目標を実行します。

㈣ ――線部分⑷の「几帳面にやって来る」に用いられている表現の工夫について説明したものとして最も適当なものを、次のア〜エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 多くの人が春の桜、秋の紅葉に感動することを、自然の偉大さがもたらす恩恵のように表現している。
イ 春、夏、秋、冬が確実にひとまわりして巡ってくることを、きちんとした人の行為のように表現している。
ウ 四季それぞれの区切りが明確に決められていることを、人が目盛りを刻む行為のように表現している。
エ 季節が規則正しく移行することを、年齢を重ねながら変化していく人生のように表現している。

㈤ この文章の内容を説明したものとして最も適当なものを、次のア〜エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 日本と外国の風景を比較することに興味を持っていた筆者が、日本の風景の移り変わりを記している。
イ 外界の景色に眼を向けるようになった筆者が、風土と結びついた日本の風景の美しさについて記している。
ウ 外国の地で、日本の風景を想像している筆者が、日本の最も美しい季節について記している。
エ 世界中を旅した筆者が、世界の四季に共通した美しさを発見したことを記している。

【新潟県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、後の(1)～(7)に答えなさい。

季節の境目が、子供の頃にはわからなかった。

それでも冬になると、私の家では男だけがする仕事がひとつあった。薪割りである。

昔はどの家も、風呂は薪で焚いていた。男達は丸太や廃材を家に運んで、それを短く切り、［　A　］斧で適当な太さに割って薪をこしらえる。でき上がった薪は風呂場の近くの軒下に積んで、(注1)筵をかぶせておく。

私が最初に父に薪割りを教わったのは、十歳くらいの時だった。

庭に呼ばれて、半日父と二人で薪割り作業をした。斧には大きいものと小さいものがあった。柄の長い、刃の大きな斧は大きな木を割るのに使う。柄も刃も小さい手斧は、小片のコッパモノ（確か父はそう呼んでいた）を割るのに使った。

最初の冬は、小さい斧で薪割りをした。意外と難しかった。

「木の目にそって刃を当てなきゃ駄目だ。ほらっ、しっかり握ってないと、指が飛んでしまうぞ」

と脅されたり、叱られながら作業をした。二十分もすると身体がポカポカとしてくる。大きな斧で作業をしている父は、いつの間にか上半身は肌着姿になっていた。空に向かって大斧を振り上げる父が大男に見えた。先刻まで［　　］としていた庭の空気が、秋の晴れ間のように膨らんだ空気になっていた。

ⓐ<u>だがそのうち手が持ち上がらなくなる。斧がこんなに重かったかと思えてくる。指が(注2)ぎごちなくなって、思うように動かない。自分の手ではないように思えてきた。</u>

「休むな。これだけやってからだ」

と父が木の山を指さして言う。あわてて次の木を台の上に置く。初めのうちは、男の仕事をしているんだと妙に喜んでいたが、次第に嫌なことを手伝わされているように思えてきた。二時間程した頃に、母がお茶と菓子を持って現れた。

「ひと休みするか」

父の声で、それぞれの台の上に腰掛けて菓子をほおばる。休憩できることと饅頭(まんじゅう)の甘さで、［B］嬉(うれ)しくなったのを覚えている。

次の年は、弟が加わった。私は大きな斧を持たされた。弟は前の年に私が使った小さな斧を父から渡された。他所見(よそみ)をしてると指が飛ぶぞ、と㋑私が言われたことと同じことを弟も父から言われる。私の大きな斧は手斧より重いし、狙(ねら)ったところになかなか刃を振り降ろせない。

「もっと足を踏んばれ。腰を落として斧を振り上げるんだ。腹に力を入れろ」

と父が私に言う。

翌年から、私と弟で薪割りをさせられた。二人だけでは、ひどく時間がかかった。木はひとつひとつ木目が違う。スパッと割れるものもあれば、固くて斧が入らない木もある。それでも不思議なもので、ひと冬薪割りをすると、一見割れにくい木も、どの辺りに刃を入れれば割れるかがわかってきて、コツのようなものが見えてくる。それに前の年に重かった斧が軽いことにも気付く。

「このコッパは楽だな」

と側(そば)で弟がひとり言を言ったりする。作業をした夜、弟と風呂に入ると、「自分で作った薪の風呂は格別でしょう。冬支度をしていただいて……」

と(注3)釜口(かまぐち)から母の声がした。二人とも一人前の男になったようで、どこか㋒むずがゆい気持ちになった。お互いの掌(てのひら)をひらいて、赤くなった指の付け根を見せ合ったりした。

ひとつのことをずっと続けていると、㋓自然に見えてくるものが世の中にはあるのだろう。うまく仕事が運ばなかったり、自分には無理だと感じた時でも、そのうち木の目が見えてくるし、㋔斧も軽く思えるはずだ。

数年前に古い家を壊して家を建替えた時、父は新しい家に道具置場を作った。そこへ入ると、三十年前のあの大小の斧が壁に吊(つ)るしてあった。

（伊集院　静「あの子のカーネーション」より）

（注1）筵……わらなどを編んで作った敷物。
（注2）ぎごちなく……「ぎこちなく」ともいう。
（注3）釜口……薪でお風呂を焚くときに、薪を入れて火を焚きつけるところ。

Step 2
(1) A、B に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 A たまに　B 既に
2 A さらに　B 急に
3 A すぐに　B 今に
4 A ついに　B 時に

Step 2
(2) □ に入る語として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 冷えびえ　2 ぬくぬく　3 しみじみ　4 ほのぼの

Step 2
(3) ㋐だがそのうち手が持ち上がらなくなる。斧がこんなに重かったかと思えてくる。指がぎこちなくなって、思うように動かない。自分の手ではないように思えてきたとあるが、この頃の「私」はどのような気持ちで薪割りをしていたのか。本文中の語句を用いて**二十字以内**で書きなさい。

Step 2
(4) ㋑私が言われたことと同じことを弟も父から言われるとあるが、この部分を「父は」を主語にして、内容を変えずに書き改めなさい。

Step 3
(5) ㋒むずがゆい気持ちとあるが、このときの「私」の気持ちとして最も適切なものを、次の1〜4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 弟と二人で大きな仕事をなしとげたことを懐かしく思う気持ち。
2 母からの丁寧な感謝の言葉を聞いて当然だと思う気持ち。
3 もう薪割りのできない父を乗り越えられたと得意に思う気持ち。
4 自分たちが一人前の男になったようでてれくさく思う気持ち。

Step 3
(6) ㋓自然に見えてくるものとあるが、これとほぼ同じ意味で用いられている表現を、本文中から**八字でそのまま**抜き出して書きなさい。

Step 3
(7) ㋔斧も軽く思えるはずだとあるが、この表現には筆者のどのような思いがこめられていると考えられるか。本文の内容をふまえて、**五十五字以上、七十五字以内**で書きなさい。

【青森県】

第十講　随筆の読解①

Step 1

一

解答

(一) はいる　(二) ア　(三) エ　(四) イ　(五) イ

解説

(一) 「はいりて」の「り」が、促音便で「っ」になったもの。動詞の終止形は「ウ段」の音で終わる。

(三) 時間の起点を示している。アは原因・理由、イは順序の始点、ウは材料を示す。

(四) 春夏秋冬それぞれの季節が狂うことなく確実に巡る様子を、擬人法を用いて表現している。

(五) 「五十代にはいってから急に日本の風景を特別なものとして受取るように」なった筆者が、「日本の風土と結びついたもので…なかなか上等な美しさを持っている」という「日本の風景」について記した文章である。

Step 2・3

二

解答

(1) 2　(2) 1　(3) 嫌なことを手伝わされているような気持ち。（20字）（同意可）　(4) 父は私に言ったことと同じことを弟にも言う。

(5) 4　(6) コツのようなもの　(7) 子供の頃の薪割りの経験は、最初は困難だと感じたことでも、継続していくうちにいつかは自分も成長し、できるようになることを教えてくれたのだという思い。（73字）（同意可）

解説

(1) A、次の仕事がつけ加えられている。B、それまで嫌な気持ちでいたのが、一瞬にして嬉しい気持ちに変わったということ。
(2) 「冬」の空気を表す言葉が入る。「身体がポカポカとしてくる」「秋の晴れ間のように膨らんだ空気になって」となる前の状態を考える。
(3) 「初めのうちは、男の仕事をしているんだと妙に喜んで」という気持ちが次第に変化していったことをおさえる。
(4) 「私」や「弟」が「言われ」たという受け身の表現が、「父は」を主語にすると、「父は～言った」という表現になる。
(5) 母から「二人とも一人前の男になったよう」に声をかけられ、くすぐったく感じている。
(6) 薪割りの例で、「ひと冬薪割りを」したときに見えてくるものとして書かれている。
(7) 子供の頃、最初はうまくできなかった薪割りをひと冬続けるうちにうまくできるようになり、斧も軽く思えるようになった経験から、どんなことでも続けているとうまく仕事が運ぶようになると思うようになっている。